

ジョルジュ・サンドに見る文学と行動 (I)

——二月革命と『ブレース・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』——

持田明子

(1994年9月17日受理)

《今や詩は行動の中にあります。その他のものは全て空疎で無に等しいのです。》⁽¹⁾

(1848年3月, 友人への手紙)

I. 「二月の日々」——ノアンからパリへ

1848年

- 2月22日：パリの労働者、学生、市民の大規模な反政府デモ。
- 2月23日：キャプシーヌ街での軍の発砲により多数の死傷者。バリケードが築かれ、赤旗が翻る。国王ルイ＝フィリップ、ギゾーを罷免。
- 2月24日：国王退位。パリ市民、議会議堂を占拠。臨時政府成立。
- 2月27日：共和国宣言。
- 3月1日：ジョルジュ・サンド (George Sand), ノアンより上京。直ちに臨時政府内相ルドリュ＝ロランと連絡を取る。
- 3月2日：ルドリュ＝ロラン、通行許可証を G. S. に発行。これにより、臨時政府全閣僚と随時、面会が可能になる。
- 3月3日：『中間階級へのひと言』 *Un mot à la classe moyenne* (発表は3月8日とそれ以降の日, *Journal du Loiret* 紙)
- 3月4日：G. S., 外務大臣ラマルチエヌと大臣執務室の窓より、二月の犠牲者達の葬列を見る。

1847年の夏、パリから帰郷して以来、ノアンを離れず、『ル・ピッチニーノ』 *Le Piccinino*, 『セリオ』 *Célio*, 『棄て子のフランソワ』 *François le Champi* を完結させ、『我が生涯の歴史』 *Histoire de ma vie*, さらに数篇の論文、ノアン劇場のための台本と、きわめて規則的に創作の筆を運んでいたジョルジュ・サンドにとって、改革宴会を始めとする反政府派の動きを伝える首都からのニュースにもかかわらず、革命勃発に続く共和国宣言は予期せぬ事態の展開であった。共和制実現の夢を大きく育ててきたジョルジュ・サンドであったが、この時期の書簡に革命への予感を読み取ることは困難である。たとえば、革命

前夜の2月18日、出版社との交渉などのために自分の代りにパリにあった息子モーリスに次のような状況分析を書き送っている。

《ボリはパリで近々、革命が起きると考えて気が動転していますが、わたしには宴会にもっともな口実があるとは思われません。失脚する大臣達と権力の座に就こうとする者達との間の駆け引きですよ（…）ギゾー氏と争うチェール氏に民衆が賛同の立場を取りはしないでしょう。チェールの方が明らかに優れていますが、だからと言って貧しい者にもっと多くのパンを与えることはないでしょう。あなたにはいつまでもパリにいることのないよう勧めます。（…）祖国のために身をささげなければならない時は、あなたも知っての通り、わたしは止めはしませんよ。でも、オディロン・バロとその仲間のために危険な目に会うなんて愚か過ぎます。あなたが遠くから目にしたことを手紙で知らせてください。乱闘があっても、割って入ったりしないように。もっとも、そんなことはないとわたしは思っていますが。》⁽²⁾ (N° 3825)

だが、共和国宣言のニュースが届くや、直ちに上京したジョルジュ・サンドが、どれほどの興奮と歓喜の中にパリの街を駆け回ったか、そして、革命遂行のエネルギーを結集したパリの民衆を称える言葉を書き綴ったか、われわれは良く知っている。中でも、40年代の始めよりその詩作を励まし続けてきたトゥーロンの石工シャルル・ポンシーにあてた長文の手紙は、パリを遠く離れた地方に住む労働者に共和国誕生の喜びと昂揚感を共有させようとするジョルジュ・サンドの溢れる思いを伝えて余りある。

《共和国万歳！ パリは何と夢や熱狂に満ち満ち、それでいながら、何と礼儀正しく、整然としていることでしょう！ わたしはこの都会を駆け回り、わたしの足元で最後のバリケードが開かれるのに立ち会いました。偉大で、崇高で、素朴で、心が広い民衆、フランスの中心、世界の中心に集結しているフランスの民衆、全世界で最もすぐれた民衆をわたしは目のあたりにしました。（…）人々は熱狂し、酔いしれています、泥の中で眠り、空の下で目を覚ますことがうれしいのです。人々を取り巻いているあらゆるものに勇気と信頼が感じられます。共和制が勝ち取られ、確実なものとなりました。私達はそれを放棄するくらいなら、こぞってそのために命を落としましょう。》⁽³⁾ (N° 3852)

通行許可証を手にしたジョルジュ・サンドはこの日以降、頻繁に閣僚達と出会い、臨時政府の立案に参画し、知己や友人を役職、委員に推薦もした。さまざまな人にあてられた手紙が証言する。

《わたしはいつも駆け回っていますよ。疲れや少ない睡眠にもかかわらず元気です。（…）ここでは全て可能な限り順調に進んでいます。政府は優れていますし、誠実です。民衆は申し分ありません。（…）わたしは毎日、政府の人間と会っています。》⁽⁴⁾ (3月3日、オーギュスティヌ・ブローへ、N° 3838)

《ルイ・ブラン氏にすでに何人かを推薦しました。》⁽⁶⁾（3月初め、R^{×××} 夫人へ。N°3840）

《あなたと会った日の夜、早速、省に出向きました。わたしはリストを見ました、すべての伝言が一つ残らず、伝えられていました。わたしはあなたを推薦しておきました。活動が始まれば、間違いなく何人かの委員が罷免されることになるでしょうから。あなたが熱意に満ち、有能で、確かな人物だと伝えましたところ、情報に感謝されましたよ。》⁽⁶⁾（3月初め、シャルル・デュヴェルネへ、N°3842）

《政府の内部と、^{フォフール}市外区の奥で何が起きているのか、わたしは誰よりもよく知っています》⁽⁷⁾（3月4日、ルネ・ヴァレ・ド・ヴィルヌーヴへ。N°3843）

この時期、ジョルジュ・サンドは、臨時革命政府がおかれたリュクサンブールに程近い、コンデ街にある息子モーリスの部屋に起居していたが、この小さなアパートマンに政府閣僚が彼女を訪れることもあった。

《わたしは相変わらず、あなたのむさ苦しい部屋にいますよ。節約になりますからね。それでも、臨時政府はわたしに会いに来ます。》⁽⁸⁾（モーリスへ。3月23日、N°3876）

ヌヴェールの弁護士であり、ニエーヴル県の政府委員に任命された、年来の知己であるフレデリック・ジレールへの手紙は、上に引用した言葉に増して詳細に、ジョルジュ・サンドの政府との関係や彼女に与えられた権限を伝えてくれよう、少しく引用しておきたい。

《全て順調に進んでいます。公的な生活がわれわれを召集し、捕らえて離さない時、個人的な悲しみは消えてしまいます。共和制は最良の家族であり、民衆は最良の友人です。他のことを考えてはなりません。共和制はパリで守られました、ですから、その大義がまだ広まっていない地方で共和制を守ることが問題です。あなたを指名させたのはわたしではありませんが、承認したのはわたしです。というのも、大臣がわたしの友人達の行動をわたしの、言ってみれば、責任にしたからですし、加えて、彼等の敵からのあらゆる陰謀や、政府のあらゆる弱さに対抗して彼等を勇気づけ、激励し、安心させるための全権をわたしに与えてくれたからです。従って、力強く行動してください。今、われわれが置かれている状況にあっては、献身と誠意だけがあればいいものではありません。必要に応じて、熱狂も要求されます。自分自身を越え、あらゆる弱さを捨てること、そして、民衆から選ばれ、実際にも本質的にも革命的な政府の歩みを妨げるものであれば、個人的な愛情をも打ち砕く必要があるのです。(…) ためらうことなく、ブルジョワ精神を完全にぬぐい去るよう、あなたにどれほど勧めても勧めすぎることはないでしょう。》⁽⁹⁾（3月6日、N°3849）（下線、引用者）

共和制に対する確固とした信念を表明した、引用の最後の下線を付した箇所は、ジョル

ジュ・サンドに《センチメンタルな革命家》しか見ようとしない評者に再考を促す契機となるであろうか。

II. ノアンで

- 3月7日：『民衆への手紙』 *Lettre au peuple* G. S. ノアンに向けてパリを発つ。
3月12日：『富める人々へ』 *Aux Riches* ノアンで共和国宣言。息子モーリス、ノアン＝ヴィック村村長就任。
3月15日：臨時政府、『共和国公報』への G. S. の執筆を決定。『ブレイズ・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』 *Histoire de la France écrite sous la dictée de Blaise Bonnin*
3月19日：『民衆への手紙』（第二） *Lettre au peuple*
3月21日：G. S. 上京。

共和制をフランス全土に広げ、確立させるために、臨時政府は労働者を地方に派遣して宣伝活動にあたらせる措置を講じたが、これはジョルジュ・サンドの進言によるものであった。「1848年3月—4月の思い出」の表題のもとに、この時期の日記と思しき断片がまとめられて、『自伝的著作集』 *Oeuvres Autobiographiques* 第二巻（プレイヤード叢書）に収録されているが、その中に、労働者派遣決定までの経緯を綴った一節を読むことができる。

3月31日。

政治宣伝のために地方に労働者を派遣することを考えたのはわたしだ。わたしは先ず、文部大臣に見解を述べた（…）ノアンで書いた手紙は臨時政府に伝えられ、政府は最初、承認した。だが、カルノ* はそれ以上たずさわらなかった。彼も、レーノー** も、シャルトンもパリのすぐれた労働者を知らないのだ。

わたしからの数日にわたる宣教の後で、この考えがついに善良なるルドリュ＝ロランの脳に浸透した。彼はいつもながらの熱意とそそっかしさで仕事に取りかかった。彼はこの事業に10万フラン費やすつもりでいる。きちんと始められれば、申し分ない成果が得られるとわたしは確信している。だが、彼はどれほどの失策をすることだろう！ 最初の選択で非常に懸念されることだが、もし彼が凡庸な人物、気取って話したり、かなり立てる人間、粗暴で、機転や利発さに欠ける人間を送るようなことがあれば、パリの労働者についてきわめて思わしくない世評を作り出すことになり、この運動を始める前より事態は一層悪化するだろう。彼はこうした批判が正しいと感じているように見える。しかし、活動の中で正しい意図は往往にして消え去るものだ。⁽¹⁰⁾（* 文部大臣 ** 文部次官）

この一節は政府との関係を伝えるのみならず、ジョルジュ・サンドの思想がどれほど現実の人間社会の冷徹な観察や、そこにうごめいているさまざまな人間の心理への鋭い洞察に根ざしたものであるかを示唆するものとしても重要である。

3月8日、ノアンに戻ったジョルジュ・サンドが直面したのは、首都にみなぎっていた

熱気からは想像もできないような、住民達の冷ややかさに隠された警戒心、共和制への無関心であった。

早くも帰郷の翌日に、彼女は著名な歴史家であり、後に政治家ともなるアンリ・マルタンにあてて、共和制実現の興奮とは程遠い無気力が地方を重く包みこんでいる現実を書き送る。

《わたしの愛している人々を早急に一人残らず奮い立たせようと努力しています。全ての人の傍に同時にいることができるものなら！ それにしても、地方はパリの民衆のあの神聖な集会所とは何と異なっていることでしょうか！ この農民達は非常に重々しく、忍耐強く、柔和で、実直です。好ましい影響に抗いはしないでしょう。けれども、彼等には自主性がないのです。どうしていいかわからないのです。肥沃になるために太陽の光を待っている土塊つちくれのようです。》⁽¹¹⁾

こうした言葉を書き綴っているのは、少女の頃からベリー地方の野原を駆け回り、農民の四季を、彼等の労働の悲哀や苦しみ、喜びを、彼等の実直さと同様、生きて行くためにいつしか身につけた鈍重さや狡猾さを……〈木靴をはいて〉つぶさに見てきたベリー人ジョルジュ・サンドである。

ジョルジュ・サンドはさらに続けて、長い歳月の間、無気力をまとい、変革を求めようとしなかった地方住民の心を揺り動かして覚醒させるために必要な指導者が欠如している現実を嘆く。

《地方の住民にとって絶対に欠けているのは彼等を導いてくれる人々です。もしこのノアンも含めてあらゆる市町村が、正しくまじめな生活を送ることができるよう仕向けてくれる確かな友人に、完全な信頼を持つことができれば！ けれども、どれほど多くの市町村にそうした友人が欠けていることでしょうか！ 嘆かわしいほどです。(…) わたしは、パリからの熱気が間もなく感じられるようになると、そして自らの権利を知らされ、その重要性を教えられれば、民衆は権利を愛するようになると信じています。》⁽¹¹⁾ (N° 3853)

首都と余りに相違した精神状態を呈している地方の現実に触れ、その隔たりを縮める必要性を痛感したことが、ジョルジュ・サンドにパリのすぐれた労働者の地方派遣の有効性を臨時政府に進言させたと言えよう。

年来の親友である、俳優ボカージュには一層率直な表現で状況報告が綴られる。

《私達は地方に革命を起こそうとしていますが、困難です。革命は起こされてはいませんし、一か月後も同じでしょう。中流階級は軽蔑的で、愚かしく、そして臆病です、農民はどうしていいか分からず、労働者はまだよく理解できずにいます。クラブが必要です。私達が遭遇したことを残らずお話ししたら、あなたは大笑いすることでしょう。とはいえ、こんな状況の中でも、私達は活動を続けます。》⁽¹²⁾ (N° 3855)

パリの民衆の意識と余りにも大きな隔たりを見せる地方にあって、ややもすれば襲われそうになる無力感、そして焦燥をこうした言葉の背後に感じ取ることは容易である。だが、それでもなお、ジョルジュ・サンドを活動に駆り立てているのは、人類のより完成に近づいた未来への揺るぎない信念に支えられた強靱な精神力にほかならない。次に引用するポーリーヌ・ヴィアルドへの手紙がそのことを十分に伝えてくれよう。

《地方で直面する、山ほどの情けない困難事や、あなたもよくお気づきのように、社会の真の敵である臆病者達が、とりわけ今の時期、作りだす危険にもかかわらず(…)わたしは幸せですよ。あれほどまでに偉大で、善良な民衆と触れ合うことがわたしを奮い立たせ、力づけてくれるパリに戻らなければ、わたしはここで、信念ではなく、熱意を失ってしまうことでしょう。ああ！ それでも、私達は共和主義者なのです、たとえば、疲労と貧窮から、あるいは、闘いの中に命を落とさなければならぬとしても。実現しているのはわたしが生涯、抱き続けてきた考えであり、夢なのです。(…)私達のありったけの時間や力、そして心を要求している重大な義務があるのですよ。》⁽¹³⁾
(N° 3868)

III. 『ブレーズ・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』執筆

臨時政府が、内務省発行の『共和国公報』*Le Bulletin de la République* にジョルジュ・サンドの執筆を決定して以来、次々と打ち出される政策の趣旨説明や、とりわけ都市労働者や農民層の啓蒙を目的として彼女が精力的に執筆した論文については、すでに、拙稿『ジョルジュ・サンドとジャーナリズム』(V)―二月革命『共和国公報』執筆―で考察した⁽¹⁴⁾。卓越した作家としての力量を頼みにして政府中枢部が協力を要請したものであり、発表された一連の文章にまさしく作家ジョルジュ・サンドの語り口を読み取ることができるにしても、それらはいくまで、臨時政府の代弁者としての――時に檄文に近い戦闘的性格を帯びさえした、政治的論文であり、また、執筆者の署名のない文章であった。

だが、この期間、ジョルジュ・サンドのペンはこうした、プロパガンダのためにのみ捧げられていたのではない。臨時政府機関紙の枠を離れて、作家として自由に、だがあくまでも自らのペンを社会正義実現のためにささげる作家として、『ブレーズ・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』*Histoire de la France écrite sous la dictée de Blaise Bonnin* を執筆した。ブレーズ・ボナンはジョルジュ・サンドの筆名であり――言うまでもなく、ジョルジュ・サンドもまた、オロール・デュドゥヴァンの筆名ではあるが――、すでに、1843年、「ファンシェット事件」を契機に執筆した『ファンシェット』の副題、「ブレーズ・ボナンがクロード・ジェルマンにあてた手紙」に登場した。学問はないが、分別にのみ導かれて物事を考え、判断を下す、このベリー地方の農夫に、作者ジョルジュ・サンドは一人称を与えて、ベリー方言 *le berrichon* で語らせる。大地のにおいをそのまま伝えるような言葉でその思いを――疑問や不満や、時に抑え切れぬ怒りを表明する、農夫の率直で、飾らぬ語り口こそが文字を拾い読みできるばかりの、無学な地方住民達の心に深く入りこみ、揺り動かすにちがいない、とジョルジュ・サンドは考える⁽¹⁵⁾。『ファンシェット』発表の翌年にも、ブレーズ・ボナンを再登場させた(『ブレーズ・ボナ

ンの口述のもとに書かれた『^{ヴァレ・ノワール}黒い溪谷の一農夫の手紙』 *Lettre d'un paysan de la Vallée Noire écrite sous la dictée de Blaise Bonnin*）。

《上手な文章が書けなくとも、それから、学問がないばかりに、考えることが法律で禁じられているようなことを口にしてしまったとしても、どうかお許し願います。》⁽¹⁶⁾ という弁明を隠れみのにブレーズ・ボナンは、大革命を経た今なお、封建制や十分の一税、農奴制、さらには夫役までもが名を変えただけで存続している実態を詳細に描き出し、農民達を昔にも増して搾取しているのは姿を見せぬ《領主》、つまり地主や銀行家達であると言明し、搾取の新しいからくりを告発した。

《大金持ちも、中位の金持ちも、ちょっとした金持ちも、わし等にとっては封建領主ではないか、それから、わし等はまたぞろ、領主の意のままにターユ税を徴収され、賦役に狩り出される類の人間になってしまったのではないか、ちょっとばかり考えてみてください（…）そりゃ確かに、領主館はもはやありはしない。だが、^{かね}金、^{きょうび}今日日の言い方をすれば、資本が、それを持っている階級を守るために、はるかに強力になってしまった！ おまけに何と巧妙で、何と使いやすく、それでいて何と重々しい力を持っていることか！ ある者にはあらゆることを可能にし、他の者にはすべてを禁止するあの黄色い貨幣は！ 昔は村に一人の領主がいるだけだった、だが、今じゃ、十人、二十人、三十人の領主様がいるってわけだ。》⁽¹⁷⁾

こうした日々の生活に根ざした、明快で直截的な語り口がそのまま、48年のブレーズ・ボナンに引き継がれる。

臨時革命政府が公報への執筆をジョルジュ・サンドに要請した3月15日、ラ・シャトルで《オイル語の手紙》⁽¹⁸⁾、つまり『ブレーズ・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』が出版された。ウラジミール・カレーニンに、《一貫した民衆的文体と、際立って明快な語りから真の傑作である。》⁽¹⁹⁾と言わしめた、この12ページからなる小冊子は、1848年の革命を歴史的発展の中に位置づけようとする、すなわち、なぜ最初の共和制で高らかに謳われ、民衆もこぞって信じた理想がたちまち霧散し、ナポレオンの独裁を招来したか、そして、彼の失墜後、シャルル十世を経て、なぜ、市民達の友人であり、支持者であると宣言したルイ＝フィリップが王位から引きずり降ろされることになったか、再び共和制を手にした今こそ、真の市民 *citoyen* であるためにはいかに行動すべきなのか、を説く、すぐれて啓蒙的な文章であるが、〈田園小説群〉の嚆矢と目される、1844年の『ジャンヌ』*Jeanne*以後、ベリーの自然を舞台とし、ベリーの農民を主要人物とする作品を書き続けてきた作家の深い観察が根底にあることは言をまたない。

《わが親愛なる小教区の人々（いやいや、^{きょうび}今日日はお互い、同志と呼び合わなければならぬという話じゃが）、おまえさま方には共和国がどんなものかまだ十分に分かっておられぬようにわしには思われましてな。（…）ほんの少しの間、わしの話に耳を傾けてはくださらんか。共和国がどのように宣言されたか、手短かに話して進ぜましょうから。》⁽²⁰⁾

とブレーズ・ボナンは語り始める。

《ルイ＝フィリップとその仲間達が国家を破滅寸前にまで追い込んでいたが、それは共和国の責任じゃない。わし等が辛抱しなけりゃならんのは、金持ち達に手ひどい打撃を与えるばかりか、わし等のような貧乏人も傷手を受けることになる、不幸な事態を避けるためさね。だが、辛抱するには、真実を知っていなきゃならんさ。わし等はこれまでずっとだまされてきた。わし等、善良な人間は今まで国の政治にはまるで無縁だった。だが、これからはわし等にも知らせてくれようし、刷り物が送られても来よう。ルイ＝フィリップの時代には厳しい御法度で、破りでもする日にゃ牢につながれたものだが、これからは、せいぜいわし等が集まって、互いに教え合わなきゃならん。つまり、市民であるとはどういうことなのか、わし等は少しずつ学んでいくのさ。》⁽²¹⁾

長い年月、知る権利を奪われてきた民衆のための無償の教育の確立こそ社会の進歩を約束するものと確信するジョルジュ・サンドは、この問題が新しい政府の取り組むべき急務の一つであることを、『共和国公報』に執筆した最初の論文（第7号）で明言するが⁽²²⁾、この『フランスの歴史』においても、ブレーズ・ボナンの言葉に民衆教育への熱い思いをにじませる。

《今から何年か後に、わし等が無償の教育のおかげで、一人残らず読み書きができるようになった時には、候補者の一人一人がどんなことをし、どんなことを言い、どんな価値を持っているのか、よく分かるようになるだろうて。それが進歩と呼ばれるものさ。》⁽²³⁾

* * *

ジョルジュ・サンドの政治・社会参加が最も直接的、先鋭的な形を取った、この二月の日々、彼女はまさに疲れを知らぬ創作のペンを走らせ、『ブレーズ・ボナンの口述のもとに書かれたフランスの歴史』とは全く別種の作品に、とりわけ首都の民衆へのメッセージをすべりこませた。4月6日の共和国劇場開幕のための戯曲『国王がお待ち』*Le Roi attend*がそれである。稿を改めて考察する。

(注)

(1) lettre à Charles Poncy, 28 mars '48.

La poésie est dans l'action, maintenant, toute autre est creuse et morte. (*Corr.* VIII. p. 372)

(2) lettre à Maurice Dudevant, 18 fév. '48.

Borie est sens dessus dessous à l'idée qu'on va faire une *révolution* dans Paris. Mais je n'y vois pas de prétexte raisonnable dans l'affaire des banquets. C'est une intrigue entre ministres qui tombent et ministres qui veulent monter. (...) je ne crois pas que le peuple prenne parti pour la querelle de Mr Thiers contre Mr Guizot. Thiers vaut mieux à coup

sûr, mais il ne donnera pas plus de pain aux pauvres que les autres. Ainsi je t'engage à ne pas aller flâner par là, (...) S'il fallait que tu te sacrifies pour *la patrie*, je ne t'arrêtera pas, tu le sais. Mais se faire assommer pour Odilon Barrot et compagnie, ce serait trop bête. Écris-moi ce que tu auras vu *de loin*, et ne te fourre pas dans la bagarre, si bagarre il y a, ce que je ne crois pourtant pas. (ibid., p. 299)

さらに、翌19日、モーリスへの手紙の末尾で、乱闘に加わらぬよう、重ねて忠告している。

Ne va pas dans la bagarre. Bonsoir. Je te bige. G. (ibid., p. 301)

(3) lettre à Charles Poncy, 8 mars '48.

Vive la république! Quel rêve, quel enthousiasme et en même temps quelle tenue, quel ordre à Paris! J'en arrive, j'y ai couru, j'ai vu s'ouvrir les dernières barricades sous mes pieds. J'ai vu le peuple grand, sublime, naïf, généreux, le peuple français réuni au cœur de la France, au cœur du monde, le plus admirable peuple de l'univers. (...) On est fou, on est ivre, on est heureux de s'être endormi dans la fange et de se réveiller dans les cieux. Que tout ce qui vous entoure ait courage et confiance. La république est conquise, elle est assurée, nous y périrons tous plutôt que de la lâcher. (ibid., pp. 329-330)

(4) lettre à Augustine Brault, 3 mars '48.

Ma mignonne, je cours toujours, et je me porte bien malgré la fatigue et le court sommeil. (...) (ibid., p. 311)

Tout va ici aussi bien que possible. Le Gouvernement est bon et honnête, le peuple excellent. (...) Je vois tous les jours nos gouvernants. (ibid., pp. 312-313)

(5) lettre à M^{me} R***, début de mars '48.

(...) j'ai déjà recommandé plusieurs personnes à Mr Louis Blanc (ibid., p. 313)

(6) lettre à Charles Duvernet, début de mars '48.

Mon ami, le soir même du jour où nous nous sommes vus la dernière fois, j'ai été au ministère. J'ai vu les listes, toutes les commissions sans exception étaient données. Je n'en ai pas moins donné une note pour toi, parce que sans aucun doute plusieurs commissaires seront révoqués quand on les verra à l'œuvre, et je t'ai signalé comme un homme de bonne volonté, capable, sûr, etc. On m'a remercié du renseignement. (ibid., p. 315)

(7) lettre à René Vallet de Villeneuve, 4 mars '48.

Je sais *mieux que personne* ce qui se passe et dans le sein du gouvernement et dans le fond des faubourgs. (ibid., p. 317)

(8) lettre à Maurice Dudevant, 23 mars '48.

Je suis toujours dans ta cambuse, et j'y resterai peut-être. C'est une économie, et le gouvernement provisoire vient m'y trouver tout de même. (ibid., p. 361)

(9) lettre à Frédéric Girerd, 6 mars '48.

Mon ami, tout va bien. Les chagrins personnels disparaissent quand la vie publique nous appelle et nous absorbe. La république est la meilleure des familles, le peuple est le meilleur des amis. Il ne faut pas songer à autre chose. La république est sauvée à Paris; il s'agit de la sauver en province où sa cause n'est pas gagnée. Ce n'est pas moi qui ai fait faire ta nomination; mais c'est moi qui l'ai confirmée, car le ministre m'a rendue, en quelque sorte responsable de la conduite de mes amis, et il m'a donné plein pouvoir pour les encourager, les stimuler et les rassurer contre toute intrigue de la part de leurs ennemis, contre toute faiblesse de la part du gouvernement. Agis donc avec vigueur, mon cher frère.

Dans une situation comme celle où nous sommes, il ne faut pas seulement du dévouement et de la loyauté, il faut du fanatisme au besoin. Il faut s'élever au-dessus de soi-même, abjurer toute faiblesse, briser ses propres affections si elles contrarient la marche d'un pouvoir élu par le peuple et réellement, *foncièrement* révolutionnaire. (...) Je ne saurais trop te recommander de ne pas hésiter à balayer tout ce qui a l'esprit bourgeois. (ibid., pp. 324-325)

- (10) C'est moi qui ai eu cette idée d'envoyer des ouvriers faire de la propagande dans les départements. Je me suis d'abord adressée au ministère de l'Instruction publique, dans les attributions duquel devait naturellement rentrer cette fonction d'instituteur des masses. Ma lettre, écrite de Nohant, a été communiquée au gouvernement provisoire, qui l'acceptait d'abord. Mais Carnot ne s'en est plus occupé. Ni lui, ni Jean Reynaud, ni Charton, ne connaissent les bons ouvriers de Paris.

Après plusieurs jours de prédication de ma part, l'idée a enfin pénétré la *volumineuse* de ce bon Ledru-Rollin. Il s'est mis à l'œuvre avec son entrain et son étourderie habituels. Il a cent mille francs à consacrer à cette œuvre. Bien entamée elle amènera, j'en suis sûre, d'excellents résultats. Mais que de fautes il va faire! Et s'il envoie, comme il est fort à craindre d'après les premiers choix, de médiocres sujets, des parleurs, des braillards, des hommes violents, manquant de tact et d'intelligence, il donnera une très fâcheuse opinion des ouvriers de Paris et le mal sera plus grand qu'avant cette démarche. Il paraît sentir la vérité de cette observation; mais, dans l'action, de bonnes intentions souvent s'évanouissent. *Oeuvres Autobiographiques*, II. (p. 1186) (*Pleiade*)

- (11) lettre à Henri Martin, 9 mars '48.

Je me hâte de chauffer tous ceux que j'aime. Que ne puis-je être auprès de tous à la fois! Mais que la province ressemble peu à ce foyer sacré du peuple de Paris! Notre population rustique, si grave, si patiente, si douce et si probe, ne résistera à aucune bonne influence. Mais elle n'a point d'initiative, elle ne *sait pas*. C'est la motte de terre qui attend un rayon de soleil pour devenir féconde. Ce qui nous manque absolument ce sont des initiateurs. Si toutes les communes étaient comme Nohant, façonnées à une bonne et honnête vie, à une confiance absolue pour un ami éprouvé! Mais combien de communes manquent d'ami! c'est désolant. (...) Je crois que la contagion de Paris se fera bientôt sentir, et que le peuple aimera son droit quand on le lui fera connaître et apprécier. (*Corr.* VIII. pp. 332-333)

- (12) lettre à Pierre Bocage, 11 mars '48.

Nous révolutionnons la province, c'est difficile, la révolution n'y est pas faite et ne se fera que dans l'espace d'un mois. La bourgeoisie est dédaigneuse, sottise et poltronne, le paysan ne *sait pas*, l'ouvrier comprend mal encore. Il faut des clubs. Vous ririez bien si je vous racontais tout ce qui nous arrive, mais nous allons toujours. (ibid., p. 338)

- (13) lettre à Pauline Viardot, 17 mars '48.

Oui je suis heureuse, (...) Malgré les montagnes de difficultés misérables auxquelles on se heurte en province, malgré les dangers que nous suscitent les *poltrons* véritables ennemis de la société, comme vous le remarquez fort bien, surtout dans ce moment-ci. Si je ne retournais à Paris, où le contact de ce pauvre peuple si grand et si bon m'électrise et me ranime, je perdrais ici, non la foi, mais l'enthousiasme. Ah! nous serons républicains *quand même*, fallût-il y périr de fatigue, de misère, ou dans un combat. C'est la pensée, le

- rêve de toute ma vie qui se réalise, (...) il y a de grands devoirs qui réclament tout notre temps, toutes nos forces, toute notre âme. (ibid., pp. 350-351)
- (14) 九州産業大学教養部紀要, 第29巻, 第2号 (平成4年12月)。
- (15) 拙稿『ジョルジュ・サンドとジャーナリズム』(Ⅲ) —「ファンシエット事件」とその後—九州産業大学教養部紀要, 第28巻, 第2号 (平成3年12月)。
cf. lettre à Charles Duvernet, 8 mars '43.
- Je serais donc *flattée* d'éprouver ce public-là un instant et je crois que quiconque sait épeler peut comprendre le style trivial de Blaise Bonnin. (*Corr.* VI, p. 270)
- (16) (...) vous prie de m'excuser si je ne sais pas bien tourner un écrit, et si je dis, faute de savoir, quelque chose que la loi défend de penser. (*Questions politiques et sociales*, p. 38)
- (17) Voyez un peu, par grâce, si les riches, gros, moyens ou petits, ne sont pas nos seigneurs féodaux, et si nous ne sommes pas redevenus la gent taillade et corvéable à merci, (...) Il n'y a plus de châteaux forts, c'est vrai; mais oh! que l'argent, le *capital*, comme on dit au jour d'aujourd'hui, est devenu bien autrement solide pour défendre la caste qui en dispose! Et comme c'est subtil, comme c'est maniable, comme c'est écrasant, cette monnaie jaune qui permet tout aux uns, et qui défend tout aux autres! Nous n'avons qu'un seigneur par village, nous en avons dix, vingt, trente, à présent. (ibid., pp. 39-40)
- (18) cf. lettre à Charles Poncy, 16 mars '48.
- J'en ai fait une autre pour les paysans de la *langue d'oïl* qui est sous presse. (*Corr.* VIII, p. 348)
- (19) Wladimir Karénène, *George Sand. Sa vie et ses oeuvres*, (IV, p. 30)
c'est *l'Histoire de France racontée au peuple et écrite sous la dictée de Blaise Bonnin*, vrai chef-d'œuvre, par son style populaire soutenu et par le récit extrêmement clair,
- (20) Mes chers paroissiens (à ce qu'il paraît qu'on doit s'appeler *citoyen* au jour d'aujourd'hui), m'est avis que vous ne savez pas encore bien ce que c'est que la République, (...) je vous réclame, de bonne amitié s'entend, une minute d'attention et je vas vous exposer, dans un petit discours, comment la République s'est proclamée. (*Questions politiques et sociales*, p. 231)
- (21) Ça n'est pas la faute de la République si Louis-Philippe et ses amis nous avaient mis à la veille de la banqueroute de l'État; c'est pour empêcher un malheur qui minerait tout à coup les riches, et dont les pauvres sentiraient aussi la morsure, que nous avons à patienter. Et, pour patienter, il faut que nous sachions la vérité. On nous a toujours trompés, et nous autres, bonnes gens, nous n'avons jamais vu clair dans les affaires de la nation. A présent, on va nous faire instruire, on nous enverra des imprimés, on nous encouragera à nous rassembler pour nous enseigner les uns les autres, chose que Louis-Philippe avait grandement défendue, sous peine de la prison. Enfin, de petit à petit, nous allons apprendre ce que c'est que d'être citoyens, (ibid., pp. 238-239)
- (22) 拙稿「ジョルジュ・サンドとジャーナリズム (V) —二月革命『共和国公報』執筆— (九州産業大学教養部紀要, 第29巻, 第2号) 参照。
- (23) Dans quelques années d'ici, quand nous saurons tous lire et écrire sans qu'il nous en coûte rien pour apprendre, nous saurons bien ce que chacun fait, ce que chacun dit, ce que chacun vaut. C'est là ce qu'on appelle le *progrès*. (*Questions politiques et sociales*, p. 240)

abréviation

Corr. = *George Sand, Correspondance*, VIII, éditions de Georges Lubin. (éd. Garnier Frères, 1971)
引用書簡末尾の番号はこの『書簡集』における収録番号である
なお *Questions politiques et sociales* は *George Sand, Oeuvres Complètes* XXX (Slatkine Reprints, 1980) を用いた。